

初めに、今回、教育実習に挑むにあたって、大学でこれまでに学んできた知識が実際の教育現場でどのように活かせるのか、また自分には何が足りていて、何がまだ足りていないのかを確認することを目標・目的とした。本レポートでは、3 週間の教育実習でこの目的・目標を達成するにあたって得た学びと気づきを大きく 3 つの項目にわけてまとめる。

まず 1 つ目は教科指導についてである。実習では、二つのクラスで古典の授業を担当した。教科書の内容をどのようにわかりやすく、そして興味深く伝えるかという点に苦心しつつも、生徒たちが反応してくれたり、自分の説明に対して質問をしてくれたりすることで、教えることのやりがいや達成感を感じることができました。特に、助動詞などの文法理解は生徒の興味・関心をひきにくく、苦手意識を持つ生徒が多くいたと感じる。そのため、助動詞の用法や意味を明確にするための過程をどのようなものにすれば良いかととても悩んだが、少しずつ理解してくれる生徒が増えていると感じることができ、励みになった。しかしながら、生徒にとっての達成感を高めるという点においては、さらなる工夫が必要であると感じ、新たな課題を見出すことができた。

また、ICT を活用した授業も体験し、単にスライドや映像を用いるだけではなく、それが学びをどう深めるかという観点からの工夫が重要であることを学んだ。ICT はあくまで教具のひとつにすぎず、使うこと自体が目的化してはいけないという意識を持ち続け、生徒の学びが豊かになるように活用していきたいと感じた。

次に学校行事や総合的な学習の時間についてである。今回の実習で、授業以外に体育祭と進路ガイダンスにも関わることができた。まず、体育祭では、競技の準備や審判として参加し、生徒たちの団結力や熱意に触れることができた。特に団活動では、3 年生の生徒がその他の生徒を引っ張る姿が見受けられ、自律的で主体的な活動の必要性を感じられた。さらに、複数の大学を招いて行う進路ガイダンスにも参加することができた。生徒が将来に対してどのような不安や期待を抱いているのかを知る機会にもなった。これらの行事を通して、授業だけでなく、学校生活全体を支えるのが教員の役割であるということを、改めて実感した。

次に生徒指導についてである。実習中、生徒指導の場面に何度か遭遇することがあり、生徒が素直に指導を受けいれている場面とそうでない場面の 2 つを実際に見ることができた。生徒が素直に指導を受け入れていた場面では、教師が指導中に、なぜその生徒が問題となる行動を起こしてしまったのか、生徒の行動の背景にある思いや事情を汲み取りながら指導するための質問や対話を意識的に多く取り入れていることが見受けられた。一方、生徒があまり納得していないような場面では、あまり対話的な活動は行わず、「この行動は違うんじゃないか」と生徒に対して否定的な言葉が多く聞こえてきた。このような対象的な指導法を目の当たりにして、生徒に対しての教員の判断や指導にバイアスがかかっているのか、単なるルールの押し付けになっていないか、生徒理解が十分にできているのか、など様々なことに気を配り、特に言葉選びは慎重に行うべきだと感じた。

この 3 つの項目以外にも、教員として働く中で意識しておいて欲しいことがあるとアドバイスいただいたことがある。中でも印象的だったのは、「生徒の悪口を言わない」ということである。そのアドバイス

を聞いた時は、生徒の悪口を言わないなんて当たり前のことではないかと感じた。しかしながら、職員室で、教員同士で生徒の話をしている際、「こいつ全然点数上がらんわ、あかんなあ」など、悪口のつもりはなくても、もし生徒に聞かれた場合に悪口と捉えられてしまうような発言も聞こえてきた。悪口を言わないという判断が難しいが、生徒に対して指導上で適切でない言葉は生徒のいない場でも使うべきではないということだと解釈した。当たり前のことであっても、無意識に悪口になってしまう可能性も鑑みて発言しなければならないということを学んだ。

教育実習を終えた今、私が最も大切にしたいと感じているのは、「実習生としての目線を忘れないこと」である。学生でもなく、かといって現場の教師でもないという立場だからこそ、見えてきたものや感じたことが多くあった。この新鮮な視点と学び続ける意欲的な姿勢を持ち続け、いつか生徒の心に届く授業や指導ができる教員になれるよう、これからも努力を続けていきたいと思えた実習であった。